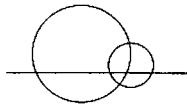


〈講演〉



## 娘から見た学長本間喜一と愛知大学

本間名誉学長 長女 殿岡晟子

【殿岡】 皆様、ごきげんよう。記念センターの本間喜一展示室にある資料などをご覧になりますと、父ってずいぶん体制派の堅くて面白味のない男かとお思いになりますが、とんでもないんです。本当は落語家にしたいくらいの賑やかな、会話の好きな笑いの絶えない男でございます。私が生まれた時はもう長という名前の付く役職におりましたので、父の若い時のことは本人から聞いたことが多いのですが、若い時は「喧嘩の本間」と言われたくらいで、それは議論の上のことですが、いろいろと討論するのが好きだったらしいのです。父は13歳の時に中学入学のため東京へ出てまいりましたが、それまでは山形の米沢で上杉藩の侍の家に育ちまして、上杉藩の素朴な、人間形成に役に立つ謙虚で質素な暮らし方をしておりました。父の父親は、14歳の時に上杉藩の一番の年少で戊辰の戦に出陣しております。父によく戊辰の戦のことを話してくれたそうです。非常に厳しい家だったのですが、父親は厳しくて母親は温かいという、戦前の日本における一番典型的な育ち方でございます。

私が生まれ育ってきた父との家庭は、本当に明るいです。女中達もいつでもニコニコしていますし、書生さんもニコニコしている。なんであんなに人を楽しませるのがうまいのかなというのが、私の父に対する一つの見方です。人に嫌な思いをさせたことがないと思います。人に恥をかかせないということもございます。ですから私は父



長男忠彦と父本間喜一、母登亀さん

から勉強しろと言われたことがないのです。点が悪くてはだめだとかいうことも一切言われたことがない。父が申しますには、「自分から進んで勉強したいと思わなければだめなんだ、そういう環境を作ってあげなきゃいけない」と、そういう言い方でもございました。皆さん勉強部屋は南向きの暖かいところがいいと思われるでしょう。でも父は、勉強するところは北向きの、少し寒いところがいいと。父の勉強部屋は確かに北向きの、昔だったら書生部屋でしょうか、玄関の横の部屋で、昔の家ですからそこまで暗い廊下をずっと渡っていかなきゃなりませんので、子供の時は父の部屋に行くのが恐かったように覚えております。でも襖を開けて「パパ」と言って膝の上へ乗っかると、そこはもう春のように暖かい、楽園のようなところでございました。引き出しを開けると中にチョコレートとか、菓屋のおまけの品などちょっとしたものが入っているのが常でした。私は引き出し

を開けるのが楽しみでした。不思議なことに、次兄も私も猫も犬も一人ずつ、一匹ずつ父の部屋を訪れました。父の愛情にどっぷりと漬かりたかったのです。



本間家族  
前列左 父 本間喜一  
母 登亀  
後列左より長男忠彦・満里子夫婦  
中央 次男 昌二郎 看護婦さん  
晟子筆者

父は武士の情けの分かる人間だったと思っています。喧嘩相手に逃げ道を開けておくような情けがありました。とことん相手が立ち上がれなくなるようなことはしなかった。最高裁にいる時もそうでしたし、弁護士の時もそうなんですけれども、いい仕事とかお金になる仕事はお弟子さんとか友達に向けていました。それで友達が喜ぶのを心の底からすごく嬉しがりました。また大学生当時の先生方を始めお世話になった方々を一生忘れない男でございまして、その方々がお亡くなりになったあとのご家族の面倒をずっと見ていました。自分が老いてきますと、遠いところは私が一人で盆暮れの挨拶に行くようにと申し付けました。私はよく小田原の三淵忠彦最高裁長官の未亡人のところをはじめ、いろいろ関係のあるところにご挨拶に行くのが常でございました。

また父は大変お金にきれいな男で、お金を集めるのも、また使うのもうまいんですが、お金に対して人から指をさされたことはありませんでした。いつも申しますには、「男が失敗するのは金と女だ」と。だから注意しなきゃいけないということをおっしゃっていました。また人を喜ばせたり楽しませたりするには、家庭の中が楽しくなきゃだめじゃないかと。ですから細君を喜ばすのがうまかったですね。母なんかだまされっぱなしじゃなかったかなと思います。上海の東亜同文書院に行く前に北京のほうに仕事がございまして、どういうわけか存じませんが内山書店のおじいさんの方（内山完造）とも仲良しだったんですね。内山書店のお店が上海にありました時に父がまいりましたら内山さんが「あれ、奥さんご一緒じゃないんですか」と聞いてとても残念がったという母宛の葉書がございまして、その隅っこに「美人は得だね、覚えられて」と括弧して書いてあるんです。昔の男の方で奥さんにそんなこと書く人っていないでしょう。それをちゃんと書くんです。だから母はすっかり嬉しがっちゃう。そういうところもございました。

また嘘をつかない男でございました。これは子供に対しても、絶対（という言葉は神以外使っちゃいけないんですけども）嘘を言わない。何でも約束したことはやってくれました。一つの例として、私が自動車のライセンスを取得したらキャデラックを買ってあげると申しました。数年後、本当にさる大会社の社長のキャデラックを私にもらってくれました。日本に数台しかない車でした。キャデラックは大学に置き、愛知大学の威光を必要とした時に乗りつけました。私は自分用にオースチンを使っていました。実業家の梅村理事の令嬢の結婚式に京都まで運転手の倉橋さんと父と三人で名神ハイウェイをドライブしたのが良い思い出でございます。ですから豊橋にこの大学を作ります時も、豊橋の市長さん始め皆様方には、嘘をついていないと思います。



愛娘の晟子さんと（昭和40年）

豊橋の女学校も、助けてくださいと言えば理事になって助けたり、女子短大についても豊橋市に対するお礼の意味を含み設立しております。豊橋にとってはマイナスな男ではなかったと私は思っております。

それから非常に人生に緻密な計算をする男でし



父本間喜一氏の想い出を語る筆者

た。夏になりますと山形の温泉にまいります。その時の計画の立て方、それから荷物に何を持っていくかというのを1、2、3、4と番号をふって書いてあるんですね。それに従って自分で荷物を作っておりましたし、私もそれを見せてもらうとああこれが必要なんだ、あれが必要なんだと物を鞆に入れることができました。こんなものまで書かなきゃならないかなというようなものまで細かく書いてある。ですから大学を作る時も、勢いに任せてバツバツと作ったのではございません。同文書院の学生さん達がみんな戻ってらして、行き場所がない、どうしよう、どうしようというその盛り上がり、まるで波乗りの波の山に乗るように父はうまく乗ったなという感じがいたします。

大学を作る時はたいてい金持ちの人がお金を持ってきて、お金に糸目なく作りますでしょう。父は引き揚げてまいりまして上陸の時に国から日本円札をもらいましたが、翌日はそれに切手を貼らないと新札として使えないんですね。使えないお金と分かっていてその日本円札を政府は引揚者に渡したのです。父は憤慨しておりました。ですから帰ってきた時はもちろん無一文です。父が持ってきたのは大きなバケツの中に大根と人参と蕪など、生でも食べられるものが入っておりまして、それにゾリンゲンのナイフが1つ。そんな物をぶら下げて帰ってまいりました。ですから大学を作る時はほんとに皆様のご援助と、学生達の大学がほしい、作ってほしい、作りたいという信念と、作ってあげたいという気持ちだけが渦を巻いておりました。東京には何も建物が残っていませんから東京ではとても無理なんですね。食べ物もありませんから。豊橋のここが空いているというのは同文書院の学生で大野さんという方がこちらの御名家の出でいらっしゃって、嗅ぎ付けた。それを神谷さんという同文書院の先生でやはり三河の御名家の方に話し、神谷先生がすぐ東京へすっ飛んできて「今なら空いてるよ」と。ですからここへ入れたんです。それも御当地に御挨拶に伺っ

た時にあの堂々たる横田市長さんが引き受けてくださらなかったらとてもできないことで、それはもういつの時代になっても豊橋市の方々の熱意を忘れては申し訳ないと常に父は思っておりました。



100年前建造物（国文化財登録）の元学長室には200×150cmのジャンボ肖像写真が飾られている

当時の文部省は、お金がなくても大学ができるんだというのが初めて分かったというんですね。係りの役人は、畏敬の眼差しで父を見ていました。驚いたことに愛大の教授の中に「愛知大学って新制大学じゃないんですか」とおっしゃる方がいるので私はエーッと思いましたが、私は大声で、声高らかに申し上げます。「愛知大学は旧制の大学でございます」東海6県と言っているのか、三重から富山まで入りますし静岡を入れる時もございしますが、だいたい東海6県に大学は理系の名古屋大学だけでございまして、文系の大学はなかったんです。ですからここに作ればこの地方の人達は大学の恩恵にあずかれる、地方の文化が発展するんじゃないかと、そういう意味もありましてここに決めたんですね。ですから豊橋は発祥の地であり、どんなことがあっても忘れてはいけないところです。何か豊橋の方々は大学が名古屋にみんな行ってしまわないかと心配なさっているということも時々伺うんですが、そんなことはありません。御当地豊橋は愛大の生みの親でございますから、大事に大事にさせていただかなきゃい

けないと思っておりますし、こんな素晴らしい場所というのはもう2度と手に入りません。市民の方々ももっとフルに愛大を活用していただいているんじゃないかなと思いますので、今度、（愛知大学東亜同文書院大学記念センター）友の会ができたということで大変安心しております。

また父はいつも明日を考え、来年のことを考えていると言うんですね。常に先のことを考えていないとやっていけなかったらしいですよ。それはそうでしょう。何しろ授業料だけしか頼りにならない。その授業料を安くしなきゃ学生さんに気の毒でございましょう。ですからギリギリなんです。物価は上がってきますし、その中でみんな我慢して、毎日未来を考えながらゆくというのが初期の頃の愛知大学でございました。ですから最初の頃は給料体系が、事務とか用務員さんのほうが学長より高かったはずですよ。逆さまになっていました。父に言わせると、上の人達はどこかからか貰い物があるだろう、だから何とかやっていけるんじゃないかなということ。でも、今月はいいいけど来月のお給料はどうしようというくらい大変でございました。昔からいた女中がいつも申しませんが、豊橋から来るお客は「お金お金、先生、お金」ということばっかしだったと。そうすると父は「大丈夫だよ、僕が作って持ってくよ」と。それで安心して庶務課長や会計課長がお帰りになっていったのをちゃんと見ております。父の友人の安倍能成先生だって戦後、学習院院長におなりの時は、知人の顔をみると「寄付をして下さい」と、「寄付」、「寄付」とおっしゃるものですから、人々から「安倍能成…号を寄付と称す」と笑われたそうです。どこの大学も台所は火の車でした。今はこんなふうに、溢れるばかりのお金じゃないとしても自由にお金が使えるようになって、名古屋の新校舎もどんどん計画が立てられ、何とも言えない幸せだと思っております。父がもしも生きていたらどんなにかうれしがりましょう。やはり計画をしっかりと立てていたからこういうふうに少し

ずつでも豊かになっていったのではないかなと思います。上に立つ人間が儲けを自分の懐に入れていたら、それこそ人は付いてきませんからね。会計は学生さんにでもお見せできるような仕組みでちゃんとやっておりました。これが父の方針でした。



新しく出来た本間喜一展示室には、生いたちから学寮時代、上海時代、最高裁判所時代、愛知大学長時代の資料が並べられている。

あれは授業料値上げの時なんです、学生の親分の方が学長室にバンとお入りになった。今は父の大きな写真が飾ってありますあの部屋に。そして値上げの文句を言おうと思ったらしいんです。そうしますと父はどんな方にも同じ言葉で相対するのが本筋でございましたから、上は陛下から下は最高裁の事務員さんまで「あなた」と言うんですね。「おまえ」とかそういう言葉は使いません。「あなたどうぞお掛け下さい」と手を差し伸べました。その学生がふと見た父の背広の袖口はかがってあるんですよ、すり切れたところを。私、一生懸命直しましたから覚えています。ワイシャツの袖と襟は破れたら裏返しにすればいいんだと。それも私、直しておりました。時計はステンレスのまあ時間がはっきり分かればいいというような安い時計でございます。その手がグッと伸びた途端に学生は頭を深々と下げて出ていってしまった。その学生御本人からこのあいだ私は伺いましたが、月謝値上げに怒鳴り込んでいこうと思ったと。その時に「あなたどうぞお掛け下さい」

と言われて父の洋服と時計を見た途端、もう何も言えなくなった。あの時にボタニーの、イギリスサージの上等な背広にすごい時計でもしていれば授業料値上げに噛みついてやろうと思ったと。そういうところが父のうまいところかも知れませんが、「いいんだよ、僕は清潔でつぎがあたってればちっとも恥ずかしくないんだ」と申しておりました。

卒業生の方々が記念に金一封をくださるんです。そうしますと全部学校に寄付しちゃうんです。それが分かってきたもんですから卒業生の方々もお利口になって、今度は名古屋の丸栄の紳士服売場のところで洋服を作る条件のもとに商品券をくださるんです。ですから名古屋に行って紺の背広を作ってきました。嬉しくて嬉しくてもう、ばか猫が初めて鼠を取って振り回し、あちらこちらに見せて回るように、新しい背広を着ては「これは卒業生がくれたんだよ、これは卒業生がくれたんだよ」とあっちこっち、文部省にまでも言ったことを覚えています。

父の鞆の中にピンクの可愛い封筒がありました。父は女子校の理事の給料を同校の図書館に寄付をして来ますので、学生達からの御礼の手紙でした。「僕は清潔にさえしていればいいんだが、(ここは内緒なんです)他の大学とか他の人達が父を見た時に、大学がこんなに貧しいのかと思われたら嫌だから、あなただけはしっかり贅沢していいよ」と言われまして、お陰様で私はだいぶいいものを着させてもらいました。いつでも方々へ行く時に私を引っぱって歩くんです。自分と私とを対比させて、質素だけれども金はあるそうだと思うさせたのじゃないかなと思います。文部省とか私学団体とか、いろいろなところに連れていってくれました。それは私に人物ウォッチングをさせるためだったかなと思っています。それで会合に出たあと「あなたはどう思う？」って聞くのです。私は自分の思った通りのことを言いますと「うーんなるほどな、そういうふうにとるかな」と言って、

「あの人はかくかくしかじか、こんな経歴の人物だ」と教えてくれました。

なぜ父が長生き（95歳まで生きました）できたかなと言いますと、父の生活習慣が老化の進展を遅らせたのだらうと私は思います。奥さんを60歳の時に亡くしておりますから、だいたい独り身になりますと男というのはバツバツと老化して死ぬのが早いんですけれども、95までボケずに生きられたというのは父なりの生活習慣の結果だと私は思っています。よく体を使いました。父の手紙を見ていると、豊橋から何日に東京に行く。それで何日は名古屋の法廷に立つからまた帰らなきゃならない。本当に1週間の間に名古屋を2往復なんていうのはざらなことですし、それから東京で裁判があればまたチョコチョコと上京します。体を非常に動かしていました。散歩もよくしておりました。常に現在の生活を嫌だというふうには一言も申しませんで、現在に幸せを感じる男でした。「生きてて楽しい」と言うんですね。明日が楽しいと。人にとっても感謝をするのがうまかったですね。「ありがとう」という言葉のみならずその人が喜ぶような言葉を言うんです。生半可な言葉ではございませんで、その人の一番喜びそうないいことを前もって調べていましたね。外交官になればよかったのじゃないかと思うくらいに詳しくいろいろと調べて、その方が齒の浮くようなお世辞じゃないんですけれどもそこまで自分を見てくれてたかなということ、それから奥様のこと、お子さんのことを本当によく調べて、人を喜ばすのが上手な男だったなと思っておりますし、また人が喜ぶことで自分も楽しんでいたように思います。好奇心を持っていて、常に脳を動かして考え事をしている。その考え事も面白いんですね、あんな年になっても化学の勉強とか物理の勉強が好きで、孫の教科書を取り上げて一生懸命本を読んでいた。学習の習慣を続けておりましたから記憶力が保たれたのじゃないかなと思います。私達は年を取るとどうしても若い人みたい

にいろいろな新しいことを覚えられなくなっているらしいんですけれども、毎日使っていればそれなりの記憶力が養われているそうです。父は勉強することによって自分を老化させないように努めていたように思います。

それから目標というものを常に持っていたように思います。今度愛大のあれはこうなるといいな、こっちは建物をどうしたらいいかなとか、学生はどういう配分にしたらいいかなとか、ほんとにいろいろな目標を持って考えて、その通りやっていくんですね。そういうのもやはり老化を防いでいたかなと思います。それから結果が出ますととても嬉しがりましたね。豊橋から東京に報告の電話がありますと、「よかったな、よかったな」と言ってまた当分の間楽しんでいるようでした。何かそういうふうの結果が出ることによってドーパミンとかが増えるんですってね。そのドーパミンが出るとアルツハイマーにならないといふので、なるほど彼がボケないのはそういうところかなと思っております。本を読む習慣を常に持っておりました。白内障の手術をしたものですから昔は牛乳瓶の底のような厚い眼鏡をかけないと調節できなくて、片目で見えていたはずなんですけど、本はよく読んでおりましたし、物事を「まあいいや」と言っておっほりだしたりしない人間でした。「何でお父様長生きおできになるの」と聞きましたら、クスッと笑って「ばかな子を残して死ねないよ」と言うんです。なるほどなと思ひまして、私がいろいろ親不孝をするのは父を長生きさせるための1つの手段だと思って、いつも私は甘えておりました。

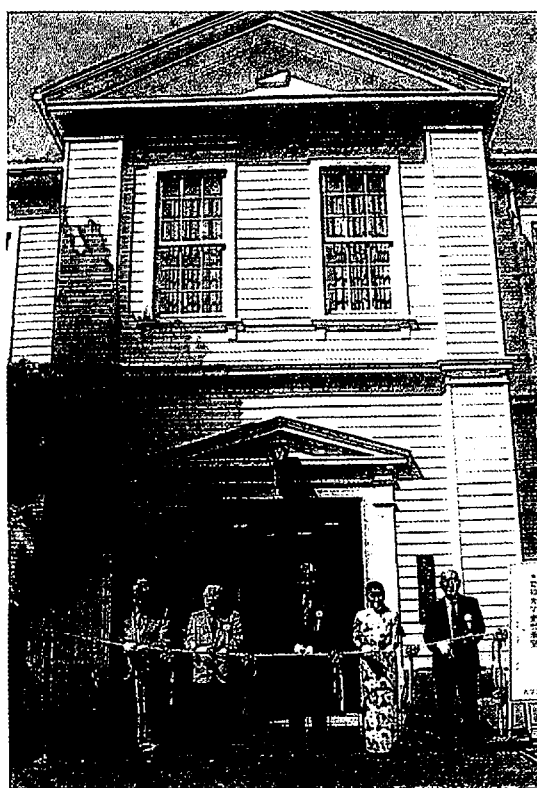
愛大というものにもすごく信頼と愛情を持っておりました。健康診断で老人病院へ行かなければよかったと考えます。院内感染で肺炎が移ってあれあれという間に亡くなりました。だいぶ悪くなってから「お父様ががんばってよ。こんなことで最子1人残したらどうするの」と言いましたら、「君、大学があるよ、卒業生があるよ」と言って



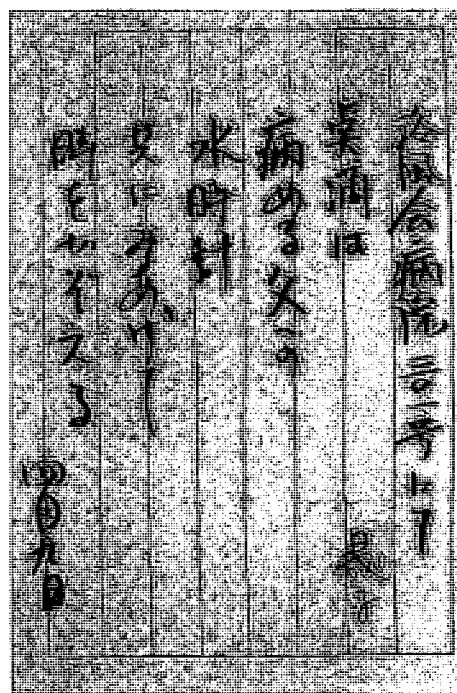
平成 13 年 5 月 25 日 本間喜一名誉学長胸像  
除幕式に招待された、本間三兄妹  
胸像右 長男忠彦氏、左長女 晟子（筆者）、  
次男昌二郎氏

くれたんですね。今つくづく父の言葉が身に沁み  
ております。いつでも何か助けてくださるのは大  
学であり、卒業生の方々です。お年をお召しにな  
っても「晟子さん大丈夫かい」とおっしゃってくだ  
さって、いつも楽しませてくださいます。だから  
私にとって愛大は、父が死んだからといってま  
るっきり縁の無くなる大学ではないと思います。  
父が子供のように大切にしていた大学を、私は自

分の兄弟だと思っております。ですから大学の発  
展をずっと見させていただきたいと思います。教  
会で葬式をいたしました。父はクリスチャンで  
はありません。法哲学者ですからバイブルは牧師  
よりも深く読みこなしておりました。父は般若心  
経が大好きで、よく口ずさんでおりました。軍の  
理不尽から学生を守り、学問の自由を大切に、  
アメリカ占領時代 GHQ の横暴にも屈せず、トン  
チで切り抜け、天下の王道を堂々と歩んだ父は、  
まことに真実味のある、約束を守る、武士の情け  
の分かる、あったかみのある男でした。皆様にも  
そう思っただけたらと思います。拙い話でし  
たが失礼いたします。



記念セレモニーお披露目のテープカット  
中央佐藤元彦学長、右隣筆者



昭和 62 年 5 月 9 日、95 才で亡くなる丁度 1 ケ  
月前に筆者が詩んだもの